

## 部派佛教に於ける

### 心性本淨説を繞る問題

香川 孝 雄

は勝鬘夫人なる俗形の女人の説法を記したもの、維摩は維摩居士なる俗形の男子の説法を記したもので、これによつて吾人はよく世間の男女に對する法と出世間の仏教の極則とを知り得るべくも、しかもこれを再考すれば太子が此三經を御覽びになつたといふのもつまり當時朝鮮を経て我口に伝來した支那仏教の一般的傾向を正確に認識し受容されたからであらうと考へらる。前記の如く其當時に我口に伝來した仏教は明らかに羅什仏教を主流とするものでしかも此系統の學者は何れも單に小品大品三論若しくは四論を研究した許りではなく、又勝鬘維摩法華涅槃等の中少くともその何れかに精通していたわけを太子も又此仏教の影響を受けられたと考へらるるのである。

かくして推古天皇の御代に至つて多種多様な文化は一先づ一調和し飛鳥時代の文化となり仏教となるのである。又曰本の仏教として成立を見るに至るのである。以上を以てとりとめもない飛鳥朝仏教の源流ならびに流伝の概要を記し諸者の方から御批判を賜り今後の御指導をお願い致します。

心性本淨説を繞る問題は、部派仏教における部派相互間の種々なる議論の課題として取り挙げるべき興味深い問題であり、これを究めることにより、(勿論當時の部派の性格やそれを取りまく幾多の困難な問題の研究も更に必要なることは云う迄もないが)各派の人間論、仏性論の性格を把握することから出来る様に思う。

望月博士の論文<sup>①</sup>には心性本淨をとるものは犢子部、大衆部であり、これを認めないものは有部、成実等であると言われている。そこでは心性本淨と直接記された聖論を資料とし、それを整理した結論であり、そこには舍利弗阿毘曇論や成実論の如き所屬部派のはつきりしない困難な問題も含まれているが、今考ふるに心性本淨説を肯定する部派は單に犢子大衆の兩派のみではないであらう。又成実論がこれに反對しているとも云へないのではないか、と考へている。

① 仏誕二千五周年記念学会篇、佛教學の諸問題と新收昭藏思想の整理につて

試みに心性本淨説に関して肯定の立場をとる資料を

挙げると次の如くである。

Angutana nikāya

「比丘衆よ、この心は極光淨なり、而して其な客の隨煩惱に雜染せられたり」①

「而して其は客の隨煩惱に雜染せられたり、無聞の異生は心を修せず」②

「……有聞の聖弟子は如實に是を解す、それ故に有聞の聖弟子は心を修す……」③

續摩提女至

「心性極清淨、斷魔邪惡念、功德如大海、今入彼邦土」④

以上、阿含尼柯耶の部の主なものを挙げたが前者の方は竜大月輪教授は原始聖典に出た最初のものであると指摘していられる。

舍利弗阿毘曇論オニ七には

「心性清淨、爲客塵染、凡夫未聞故、不能如實知見、亦無修心、聖人聞故、如實知見、亦有修心、心性清淨、離客塵垢」⑤

と増支部と同じ説き方をしている。以上は明らかに客塵煩惱の説であり、心性本淨を自己の所説としてゐる様である。

① 増支部オ集、白と隱覆小品「九、南伝藏七、二四頁

② 増支部オ集、彈指品一、南伝藏七、一五頁

③ 同、右二、南伝藏七、二五頁

尚ほ多く「此の心は極めて清淨である」の表現を用いてゐる。

④ 大正藏二八四二〇、赤呂氏によれば本至は増阿含至三〇三に相当する。

⑤ 宝幢会篇藏要和三昧合璧勝鬘至宝月童子所問至

⑥ 大正藏六六九七〇

三

更に分別論者の説とするものがかなり多くあるのに気付く。次にそれを挙ぐれば

大毘婆沙論卷オニ七

「謂或執心性本淨、如分別論者、彼説心本性清淨客塵煩惱所染汚故相不清淨」①

阿毘達磨順世理論卷オヒニ

「分別論者作如是言、(中略)聖教亦説心本性淨、有客塵煩惱所染」②

成唯識論卷オニ

「分別論者、作是説心性本淨客塵煩惱所染汚故、爲客塵」③

心性論オニ

「若依分別部説一切凡聖衆生並以空爲其本、所以凡聖衆生皆從空出故、空是仏性、仏性即大涅槃、若依毘婆沙多等諸部説者、則一切衆生無有性得仏性、但有修得仏性」④

以上はすべてこれを分別部の説とし、反対するものは仏性論に記し自部であるとしているが、外に異部衆輪

論には、大衆部・一説部・説出世部・鵝鳩部本家同義の箇所に

「心性本淨客塵煩惱之所雜染。説爲不淨」<sup>⑤</sup>

の文があるのみで今迄これ以外に何部がこれを取り、何部がこれに反対したかの文は見当らない。

① 大正藏 八、六九七、ム

② 大正藏 二九、七三、ム

③ 大正藏 三二、ハ、C

④ 大正藏 三七、ア

⑤ 大正藏 四、一五、C

#### 四

それでは心性本淨説を何故に破したのであらうか。有部系の論書である尋沙論オニ七には次の如く語っている。

「若心性本淨客塵煩惱所染汚故相不清淨者。何不客塵煩惱本性染汚與本性清淨心相應故其清淨」。若客塵煩惱本性染汚難與本性清淨心相應而相不清淨。亦應

心性本淨不由客塵煩惱相不清淨。義相似故」<sup>①</sup>

清淨心が不清淨なる客塵に化せられて不清淨の相を示すならば、不清淨なる客塵が清淨なる心に化せられても清淨の相を呈する筈である。後者が若しそうでないとするは、前者の論理も成立しないとし、更に鋭い批判をあびせて。

「又此本性淨心爲在客塵煩惱先生。爲俱時生。若止先

生。心已住待煩惱。若爾心至二刹那住。有違宗大」<sup>②</sup>

とし、これと同じことが順世理論、成実論に述べている。即ち順世理論オセニに

「謂若先有自性淨心。後煩惱生方被染者。心淨心体非刹那滅」<sup>③</sup> とし又成実論オ三には

「煩惱与心常相応生。(中略)是心念々生滅不待煩惱。若煩惱共生不名爲客」<sup>④</sup>

と刹那滅のことより論破せんとしている。

① 大正藏 三七、一四、ア、ム

② 大正藏 三〇、一四、ム

③ 大正藏 三七、七三、ム

④ 大正藏 三二、二五、ハ、ム (但しこの文は自己の故に批難の言ではない様である。心性本淨論者の説もありて両者の回答の形になつてゐるのを望月博士の云はれる如く本淨論に全く反対してゐるとも云へないのは宜いと思はれる)

#### 五

こゝで判明したことは、両者の見解の相異を来すキーポイントとなるものは刹那滅の問題である。刹那滅に固執するところに、本淨説と矛盾するところが生じて来る。刹那滅は当時の重大問題であつた。こゝで補特伽羅の問題が生じ来る。俱舍論オ三〇に

「若定無有補特伽羅。爲可說何誰流轉生。死不生。死自流轉故。然薄伽梵。與經中說諸有性無明所覆。貪瞋所



「繫馳流生死故心定有補特伽羅」と説き

「若一切損我体都無、利耶滅心、於增前受及相似境、何能憶知」。

と云ふ如く輪廻の主体たる補特伽羅を設定する必要にせまらしたのであり、犍子部の補特伽羅、經量部の一味蘊、正量部の果報識、分別上座部の有分識、化他部の窮生死蘊、大衆部の根本識が有名であり、反對するものは該一切有部であつたと云はれてゐる。この様に考へると、輪廻の主体を認める犍子部、聖量部、正量部、分別上座部、化他部、大衆部の諸派は、心性本淨説をとり得るものであり、利耶滅との矛盾も生じない理窟となつて来る。唯、一切有部のみは、婆沙論、順世理論等の記事から見ても反對の立場をとつたものであらう。

① 大正藏 二九、一五六、〇

② 大藏 二九、一五六、〇

## 六

そこで以上の資料によつて、整理すれば次の如くなるであらう。先ず増支部、増一阿含聖が自説の形をとつてをり、大衆部に所属すると考へられてゐるが、舍利弗阿毘曇論の所屬部派は不明である。又成実論も一向にその性格を犯み難くオ三者的立場をとつてゐる様でもあつて部派の所屬<sup>②</sup>もわからない。その他の多くは分

別部説としてをり、又有部は反對してゐる。更に利耶滅の時間論から、補特伽羅への考察によつて、犍子、正量、聖量、分別、化他、大衆の諸派は凡らく心性本淨説をとり得たであらうと云ふことになつた。一かし有部の説は心性不淨と云うのではなく、寂尊所説の緣起法により、仏性論に云ふ如く修得の仏性は認めてゐるのであつて心は本末は無記なものであるとするものであり、中口における性住性惡の説とは根本的に異つた觀念が伏いてをり、そこには中口人と印度人（特に仏教）の思惟方法の差を充分に特徴付けてゐる様に思はれる。

① これに内、大智度論卷二（二五、五七）には「有人言、佛在世時舍利弗解佛結、故作阿毘曇、後犍子通入等讀誦至今、名舍利弗阿毘曇」の記事及び慈恵心の妙法蓮華經末廣本（大正藏、六五）の「舍利弗阿毘曇、佛續、六十二見、正量部」の二の説があるが、いふ所も僅かに定まらない、木村泰賢博士「阿毘曇論の研究」（八頁）にも「正量部に属すると見る意見もあるが、これは犍子部所屬と見るより當不確実である」として居られる。

② 成実論も亦はさうでない、宇井伯壽博士「印度哲學史」（三四頁）には聖量部の説を發するといふ木村泰賢博士「印度哲學史教思研究」（二八頁）には大衆部的とされてゐる。本論に於ける心性本淨説に対する向背は、論者言、有く説に性本淨……又説不然」といふ形式で始まつてゐるから、どう見てもオ三者的である。

これは作者の訶梨跋摩は有部の教序を學んだがこれを喜ばず、広く諸部を研究してゐたことより考へて、この場合はオ三者的立場よりの傍觀的態度の概である。